

第4回 府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議（概要）

1 日 時

令和3年8月31日（火）午後3時～午後5時

2 場 所

京都産業大学むすびわざ館 3-A（3階）

3 出席者

- 委員 10名（欠席なし）
- 教育委員会 橋本教育長、木上教育次長、山本教育監、吉村指導部長、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、平野管理課長、村田高校教育課長、坂田高校改革推進室参事 ほか

4 概 要

- 事務局からの資料説明および質疑応答
- 協議

◆：座長 ○：委員 □：教育委員会

■事務局からの資料説明

■質疑応答

- 在籍している府立高校に改善してほしいことに対して、スマホ等の利用という回答が上位にあがっているが、現在府立高校では、スマホの学校への持ち込みについてはどのような状況か。
- 学校によって対応が異なる。スマホの持ち込みを許可している学校でも、授業中以外は使用してもよいという学校もあれば、昼休みしか使用を許可していない学校もある。BYODとして、入学時に保護者の了解を得て、授業でスマホを活用している学校もある。
- ハーズバーグの動機付け・衛生理論というものがある。理論的には、いくら頑張っても満足度が上がらない項目と、頑張れば頑張るほど満足度が上がる項目の2種類があるということになる。例えば、どれだけ生徒が満足いくような校則にしたとしても、満足度はおそらくあるところから上がっていかないだろう。逆に授業などは、満足度を上げようと思えば、ずっと上げていけるような気がする。これまで、そういった観点による調査結果などはあるのか。
- 京都府においては、こういった項目によるアンケート調査は今回が初めてである。比較の参考として、第2回会議資料の「在籍校を選択した理由・進路選択に対する満足度」についての国の調査結果はあるが、照会のような観点での分析結果については、持ち合わせていない。

■協議（主な意見）

◆アンケート結果について、様々な立場から御意見をいただきたい。

○高校選択の理由で「自宅から近い・通いやすい」が多いことや、生徒の満足度が高いという結果から、府教委や府立高校において尽力してこられたことが影響していると感じた。前回の会議で「適正規模」という言葉で表現したが、例えば学習における規模や、生活集団としての規模など、何に対して適正かという整理も必要だと思う。学習においては、生徒の人数に対して先生の人数が充実している方が、生徒へのフォローや、生徒の理解をさらに深める指導をしていくということができる。部活動や学校行事は生活集団の方になると思う。最近、教員を目指している大学生に「自分自身が成長できたエピソード」を尋ねる機会があり、半数以上が高校時代の部活動の体験を取り上げ、みんなで考えた目標に向かって頑張ったこと、意見がぶつかり合って調整したこと、レギュラーから外れた中でチームのために自分がやれることを見つけ頑張ったことなどを話してくれた。集団の中で人間関係をつくったり、社会人としての基礎力を養ったり、生徒自身が多様性から学ぶことも多い。そういった意義を踏まえて、適正規模についても検討が必要である。

○学校の規模については、部活動や学校行事、多様な学科編成、PTA活動に至るまで、大きな影響を及ぼすと思う。生徒が切磋琢磨しながら資質・能力を伸ばし、豊かな人間性をはぐくむという観点から、地域ごとの特性を踏まえつつも、一定の学校規模を維持することが必要であると考えます。

○アンケート結果では、在籍校に対する満足度の理由の上位3つが、「友人や先輩との関係」、「授業」、「部活動」となっている。生徒の学習面や生活面から考えると、一定の学校規模があった方が、生徒たちが集団の中で多様な考え方に触れることができ、お互いに認め合い協力し合って切磋琢磨するということを通じて、生徒一人一人が資質や能力を伸ばしていくことができると思う。一定数の生徒数と教員数があることで、グループ学習や習熟度別といった多様な指導形態もとりにやすい状況となる。体育祭等の学校行事でも、一定数の生徒がいることで活気が生じ、クラス対抗、学年対抗、縦割りの集団対抗など、多様な活動が可能である。生徒が多ければ、様々な種類の部活動を設置することもでき、学校選択の要素にもなっていると思う。また、クラス替えなどを通じて、豊かな人間関係を構築していくということもある。

○学校運営の面では、教職員数が多いことのメリットもある。一定数の教職員がいることで、学年別や教科別で教員集団をつくれることになり、その集団で学習指導や生徒指導などについての相談や研究、協力などが行いやすく、組織的な指導体制を組むことができる。教職員の休暇や、研修などによる出張に対するフォローも行いやすい。人事面でも、年齢や経験を踏まえてバランス良く教職員を配置することが行いやすいのではないかと。様々な教員がいるということ

は、複数教科の教員免許を持つ者や、異なる校種の教員免許を持つ者などが、教科横断的な学習や学び直しなどで力を発揮してくれるということにもつながる。その他の面では、生徒が多いことは保護者も多いということになり、PTA活動に関する役割分担等もしやすく、保護者の負担が分散しやすいということなどもある。

- アンケートの結果を見ると、生徒たちが高校で基礎的・基本的な学力を身につけることを大切だと感じていることと合わせて、部活動や学校行事で良い経験をして、そこに魅力を感じ、期待しているということがわかる。自分の特長や興味などを活かせるような文化系・運動系の様々な部活動があつて、生徒たちが自分の選択肢を広げることができるということは、非常に大きなポイントだと思う。小規模校では、合同チームでの大会出場や、教員の指導体制等の課題が生じてくる。生徒たちの望んでいる部活動や学校行事を確保するという点では、適正規模が大事であると思う。
- これまでの会議で意見があつたが、コロナ禍にあつて、オンライン授業の実施が学校に求められているという現状がある。先日、中学生の作文を読む機会があり、オンライン授業は必要だと書いている生徒もいる一方で、対面で自分の友達とコミュニケーションをとること、そういったことが学校の一番の魅力であるとしている生徒が非常に多くいた。生徒たちが、学校で感動を覚えたり、生きる力を身につけたりしているということ、学校は大事にしないといけないと思う。特に部活動はオンラインではできないと思う。生徒たちが、学校行事や部活動は切磋琢磨して自分を磨いていける場なのだと訴えているように感じた。そこで学んでいることが生徒たちの力になっていると思うので、生徒同士や教員との関係において、対面でコミュニケーションをとれることも大切にしなければならないと思う。
- アンケートの結果で、高校生が「目標を立てて計画的に実行する力」を高校時代に身につけておく必要があると思っていることに驚いた。目標を立てて計画的に実行するという事は、小学生の頃から継続してやっていることであると思う。小学校や中学校時代に、学習や部活動でそれをやってきたことによって、自分が何かを成し遂げたり感動したり、そこから何かを得たということを知っていて、自分の将来にさらに必要なことだと高校生が思っているというのは、とても前向きな意見だと思う。目標を立てて実行するのは当たり前のようだが、高校生が良い経験をしてきている証ではないかと思った。
- アンケート結果について、基本的には在籍校への満足度も非常に高く、とりわけ部活動についての満足度が非常に高いということ、それから積極的な理由で高校を選んだ生徒の満足度が高いということが特徴的だった。これまでの「多様性」というキーワードも含めて、近いところ・通いやすいところに高校があることが、非常に大きな入学動機になっていることも明らかになったと思う。施設整備についての要望は、公立の学校ではよくあることだと思う。BYO

Dの導入によって、スマホやタブレットの活用で改善できる部分もあると思う。また、校則についても、例えば探究活動で取り上げるなど、改善に向けた可能性は感じている。進路決定の遅さが特徴として出たことについて、国際機関の調査によると、キャリア選択・大学進学・高校選択において、日本は遅い傾向にある。この点は日本人らしさが出ており、京都でも同じ傾向が出た。これについては議論の余地があるという感想を持った。

○今回のアンケートは非常に評価できると思う。教育の調査は難しく、欧米に比べると、日本のデータが少ないという話がよくある。今回のようにwebを活用することで、費用も時間も軽減できるので、今後は経年調査を期待したい。今回は高校1年生の満足度であったが、おそらく高校1、2年生と3年生とでは、回答が違ってくるように思う。高校に入学して間もない1年生から、もう1年ぐらい高校生活を経験することで、もう少し部活の数値などが上がってくるかと考えられる。どこにターゲットを置いて調査をしていくのかなど、検討の余地があるように思う。

○様々な自治体の調査における1つの共通見解として、高校生に対する調査実施はなかなか難しいということがある。小中学生の場合は自治体を通して一定のコントロールが利くが、高校生は通学範囲が自治体・住所地を越えてしまうので、調査実施が難しい面がある。そのような状況でも行われている他府県の高校生の調査では、家庭生活面等についての質問項目があるものがある。例えば、保護者の就労状況や生徒のアルバイトの状況、自己肯定感や健康に関する質問、SNSやゲームの時間、誰に相談できるかなど、非常に突っ込んだ質問を行い、エビデンススペースで政策をつくっていく県もある。生活面の状況というのが、京都府の公立高校においても1つの視点として重要ではないかと感じた。

○また、国際調査との比較という視点では、日本財団が行っている「18歳意識調査」がある。自分で国や社会を変えられると思うか、どのようにして国に役立ちたいと思うかといった項目において、9カ国の調査と比較しているが、日本は軒並み低く、9カ国の中で最低である。国際的な視点や社会との関係性についても踏まえて、調査していく案である。こういったことも高校3年間のうちに調査すると、政策を考えるとときの参考になるのではないかと感じた。

○アンケート結果には、全体傾向だけではなく、課程・学科ごとの特徴がかなり出ており、それに注目する必要がある。在籍する府立高校を選択した理由を見ると、普通科では部活動が強く出ているが、他の課程や学科では部活動というのはそれほどでもないと思う。その他の専門学科では、特色ある授業内容や研修旅行などの学校行事が、注目すべき項目としてあがっている。職業学科・総合学科では、将来就きたい仕事と繋がっているか、就職に有利かどうか、というものが出てきており、それと関係して、授業でも単に知識の伝達だけではなくて特色ある取組が求められている。夜間定時制では、同列1位のうちの1つが「授業についていけそうだ

ったから」である。これはおそらく授業のレベルのことだけではなく、自分の生活スタイルを含んでの選択だと思う。これらは単に高校選択の理由というだけではなくて、生徒たちが求めている要素であるので、それぞれの課程・学科で力を入れるべき領域でもあると思う。在籍している府立高校の魅力でも、同じように普通科では部活動、その他の専門学科では大学等進学に向けた指導、職業学科・総合学科では就職に向けた指導、定時制では自分の生活スタイルに応じた時間に学べるといったことがあがっている。課程・学科ごとに生徒から求められていることが違うということは、十分留意する必要があると思う。

○府立高校にどのようなことを期待するかと、志望校を検討する時に高校に期待していたことは何かとでは、かなり違う結果となっており、入学前と入学後のギャップと言えるかもしれない。入学前の志望時には、学校行事や部活動に期待をしていたが、入学後の今期待していることは、基礎的・基本的な学力を身につけることや、大学等進学のための学力を身につけることといった学力面が上位にきている。ここから、入学前に期待していた部活動と学校行事については入学した高校である程度満足はできたが、学力形成面では不満を感じているということがうかがえると思う。特に学力面の「基礎的・基本的な学力を身につける」というのは、全ての課程・学科で、期待していること上位3位に入っており、全ての課程・学科において、これからも強化をしていく必要があると考えられる。

○府立高校の魅力を高めるためには、一律にどこでも部活動をやるというだけではなくて、それぞれの課程・学科ごとの魅力、強みを生かしていくという方が有効なのではないかと思う。普通科では部活動の充実。その他の専門学科では探究活動や特色ある取組、生徒の関心にそれぞれ合った科目選択や学校行事の充実。職業学科・総合学科では授業での特色ある取組や仕事との繋がりでの充実。定時制では、生活スタイルや興味関心も含めて多様な生徒が在籍すると思うので、より柔軟なカリキュラムを提供するということが有効であると思う。

○職業学科に関しては、今回は高校生対象のアンケートだったが、高校生の実習先の企業などを対象に、高校段階でどのような資質能力を習得することを求めているのかなど、情報収集を行うことも考えられる。その上で、教育界と産業界とで協働してカリキュラムをつくるのが有効だと思う。その際には、産業界のニーズや生徒のニーズといった、非常に多様な観点をマッチングさせるため、柔軟な多様さが求められると思う。卒業後すぐに就職する人材も必要だと思うが、これからは高校卒業後に大学の工学部や農学部に進んで、将来その分野を担う人材を育成することの両方が必要だと思う。高校選択時には自分の適性がまだ分からないということもあると思うので、2年生からコースに分かれる、途中からでもやり直せるなど、そういう多様なカリキュラムを、産業界と教育界と生徒の3者のニーズを共に交差しながらつくっていくことも考えられる。また、そういった学科や課程の特徴を踏まえ、強みを高めるためには、一定の学校規模は確かに必要かと思う。

○京都市周辺には多くの高校があるので、仮に京都市内にある普通科をいくつか統廃合したとしても、生徒にとっては近い、通いやすい高校である状況に変わりはないが、丹後地域や中丹地域で一律の基準で統廃合となると、通えない生徒が生じる可能性がある。交通網や通学時間、交通費などの事情は、地域によって大きく異なるので、どの地域でも一律の基準で高校再編を検討することは望ましくない。地域の特性を踏まえるべきだと思う。また、普通科についてはある程度再編が検討できると思うが、職業学科や定時制の場合はそれぞれ特徴があり、単に生徒数だけでなく、存在価値の高さということもあると思う。他府県からも生徒を集められるような仕組みや広報活動、あるいは寮を設置するといった方法で、維持していくという考え方もあると思う。

○基礎学力をどう保障していくかという視点は重要である。先ほど、目標を立て計画的に実行する力は小学校から高めているのに、高校でも身につけることが求められているという話があったが、大学入試の競争率が下がっていることが影響していると思う。以前は大学受験というのが、普通科高校の教育目標になりえていたが、現在大学全入時代と言われるように、受験倍率はどんどん下がっていると思う。ある著書では、大学入試は進学中堅校の生徒のインセンティブにはなっていないことなどが、データで明らかにされている。大人の感覚では、高校生は大学受験を目標にして勉強すると思っているが、もう今の生徒はそう考えてはいないと思う。高校生はおそらく、小学生中学生よりも目標が見えにくい、それが学習意欲に繋がらないというところもあると思う。そこで、基礎学力の定着を測る京都バカロレアというような仕組みをつくってはどうかと考える。現在、高校3年間の基礎学力を問う試験というのは、日本には無いと思う。高校の教科書の基本的な例題が解けるか、教科書の文を読んで理解できるかという問題をつくって、5教科全範囲によって高校3年生の時に受験させ、合格した人は京都府教育委員会の認定の資格として履歴書に書けるようにするという仕組みである。高校の修了とは関係ないようにした方が良いが、何か1つ目標をつくる。大学受験の勉強をしないという人も、このバカロレアを取ることで、一定の基礎学力があることの証明になり、就職する際にも、また進学する際にも、活用できるのではないか。京都府立高校はどの生徒にも一定の基礎学力をつけるという証明になり、生徒募集にもつながるのではないかと思う。

○アンケートの、高校時代に身につけておく必要があると思う力の回答において、学力的な観点に偏らず、「目標を立てて計画的に実行する力」、「多様な人と人間関係を構築する力」、「失敗しても取り組み続ける力」、「現状から課題を見出し、解決する力」といった、人間性など様々な資質や能力の観点から選択していることが、素晴らしいと思った。

○今コロナ禍で、GIGAスクール構想等によって、オンラインでの授業も導入され始めている。現代は、人前で話すのが苦手な子どもたちも、オンラインで発信しなければいけない時代

になっている。多様な生徒への対応や、オンラインでの家庭学習などが進むと、家庭での保護者の関わり方も変わってくる。

- 新学習指導要領に基づく教育活動が小中学校で始まり、次は高校という状況である。学校では新たな学習への対応が求められている中で、さらにコロナ対応にも迫られ、学びの保障に向けて取り組まれていると思う。新学習指導要領について、ある教育関係者の研修会のセッションでの、新しいというよりも柔らかい教育がこれから求められているという発言が印象的であった。それが多様性に対応した教育ということにも繋がると思う。柔らかく、それでもしっかり芯はあるという教育が、これからは大事だと感じた。
- アンケートの結果によると、2学期に高校選択を行う中学生が多い傾向である。中学校での部活動に一区切りつけて、次は高校進学について真剣に検討していく時期ととらえていることがうかがえる。
- 全日制の普通科の人数が大多数なので、家から近いからという学校選択の理由は、一般的な中学生の感覚なのだろうと思う。高校受検のときに志をしっかりと持っている生徒たちは、自分がこういうことを学びたいと意欲を持って勉強に取り組むと思うが、そうでない生徒も非常に多いのだと思う。そういった生徒たちが高校生活を過ごす中で、自分自身の進路を真剣に考えて、目的意識を持って取り組もうとしたときに、満足できる学びがしっかりできる環境や教員体制を、府立高校では準備していくことが大事であると思う。
- 多数の府立高校があつて、学校ごとに魅力や特長があり、授業力の高い教員も大勢いると思う。それぞれの学校の良いところを、学校間で共有したり、活かし合えたりするような仕組みがあればよいと思う。
- 高校選択の理由の上位が、自宅から通いやすいや雰囲気が良いなどであり、きっかけは何であれ、府立高校を選択した生徒たちを府立高校においてどういうふう育成していくかということ、考えていけないといけない。高校時代に身につけておく必要があると思う力については、非常に良い傾向であると思った。目標を立てて計画的に実行する力が1位で、課題抽出力も10%程度回答があつた。課題形成力があればもっとよかつたかもしれないが、こういった資質・能力は、社会に出て会社に就職してからも、常に求められ、高めていかなければならない力である。だから、高校1年生の段階からこういうところに問題意識を持っているという傾向は、非常に将来有望だという感想を抱いた。
- 京都府の教育のスタイルとして、それぞれの高校で様々な特色を出そうとしていると思うので、このアンケート結果だけをもってまとめて論じるのがいいのかどうかについては疑問であ

る。ただ、経年的なアンケート調査が必要だという発言もあったが、集団として見た場合に、この結果を是とするのか、あるいは逆転の方がよかったのではないかとといった議論が、教育委員会の中であった方がよいのではないかという気がする。何に重心を置いていくのかということ、今回の結果も踏まえながら考えていくことが重要であると思った。

○学校に改善してほしいことの1位が「施設・設備」だということは、興味深く感じた。会社などでも同じであるが、昼食をとる施設やトイレというのは、満足度を高めるための重要なファクターになってくると思う。費用負担はあるが、ICT活用などの教育環境整備が当然必要である一方で、ニーズを踏まえるとトイレなどの整備も重要であると思う。

○今回のアンケート調査の結果を見て一番印象に残ったのは、学校に対する満足傾向の理由と不満足傾向の理由の両方で、「授業」が上位であったということである。このことから、満足に感じるのも授業、不満に思うのも授業なのかなと思う。学校現場では大半の時間はやはり授業が占めるので、生徒たちがそこに注目し、非常に敏感に感じてくれているというふうに感じた。

○アンケート結果からは、全日制普通科と、その他の専門学科、職業学科・総合学科の結果に、若干の差異が生じていることがうかがえる。その他の専門学科、職業学科・総合学科に進学した高校生については、中学校の比較的早い段階から高校の授業など、教育内容に興味を持って、高校のことをよく調べているという傾向が出ていると思う。逆に言うと、全日制の普通科に進学した生徒については、中学校の段階で高校選択に対する積極的な姿勢という面では、少し避けているきらいがあるように思う。その他の専門学科、職業学科・総合学科に進学した高校生については、やはり授業に対する満足度が、全日制普通科に進学した生徒よりも若干高い傾向である。中学生のほぼ全員が高校進学をする現在では、中学生の時点でどのように高校生活に目標や目的を持つか、高校に行って何をするのかといった視点が重要である。それは何も勉強だけでなく部活動や友達関係を深めることであってもいいので、高校生活に向けて目標や目的を持たせるということは、中学校における大きな課題ではないかと思う。社会人講師を招くなどして、生徒たちが目標や目的、夢を持つきっかけづくりをすることも、中学校段階での取組として有効であると思う。

○先日の新聞報道で、あるアンケートの結果が掲載されていた。高校生全学年の保護者を対象とした、保護者として子どもの進学先を選ぶポイントは何であったかという質問において、結果では、「高校の知名度」が2割弱だったのに対して、「高校で学べる内容」が5割で一番多かった。やはり、我が子が高校へ行って、どんな勉強をしてどのような力をつけるのかということは、保護者にとっても非常に関心が高いことが表れた結果であると感じた。

- アンケート結果にも表れているように、生徒募集で多くの生徒に選んでもらうためには、やはり施設・設備の整備というのは重要なファクターなのだと思う。
- ◆率直に、在籍校に対する満足度が非常に高いと思った。一般的に学校単体のアンケートにおいて、卒業時に「この学校の満足度はどうでしたか」という調査を行うことがあり、8割を超えると良い方だと思う。卒業直前というのは、もう3年間通った後で、ここで不満だと言ってしまうのがないということで高くなる傾向があるが、今回の1年生段階でこの数値は、非常に高いと思う。
- ◆家から近い、通いやすいという要素は、やはり公立高校においては重要である。公立高校においては、通えないエリアをつくってはいけないと言えると思う。山城地域や京都市内などでは学校がたくさんあるが、丹後地域や中丹地域などでは、学校の配置をしっかりと考えないと、府立高校としての役割が果たせなくなると思った。また、学科・課程ごとに、回答の傾向が違うことは、それぞれのニーズに合致したカリキュラム等が提供できているということに繋がると思う。
- ◆アンケートの設問を見ると、在籍している高校について聞いた質問と、「高校時代に身につけておくこと」や「府立高校にどんなことを期待するか」という一般的な質問との2種類に分けることができる。一般的な質問だと、やはり「いいこと」を答える傾向が出ると思う。「いいこと」というと変かもしれないが、「目標を立てて計画的に実行する力」や「基礎的・基本的学力」など、小学校からずっと求められてきたようなことを回答する傾向である。それに対して、自分が在籍している学校個別に関する質問では、違う傾向があるという感じがする。
- ◆満足傾向の理由も不満足傾向の理由も、「授業」が非常に強調されている。授業がいいと満足する、悪いと不満足になる。それに近いものとして、部活や学校行事もある。広い意味でのカリキュラムであり、教育活動全般と言える。逆に、トイレ、スマホ、校則、制服といったものは、悪ければ不満足となるが、良くては学校のセールスポイントとしてあげる生徒はあまりいないと思う。やはり、学校の魅力やポイントは、授業、部活動、学校行事といった「本業」なのであろう。子どもたちの成長に影響を与える、広い意味でのカリキュラムの充実が、重要なポイントであると思う。そのように見ていくと、府立高校の在り方においては、やはり本業に力点を置いて今後検討すべきであることが見えたと思う。
- ◆今回は、少子化の進展と地方創生における高等学校の在り方について協議をしていきたい。特に、普通科の在り方や普通科系専門学科を含む専門学科等についてもテーマとしていくので、よろしくお願ひしたい。